

『うたに刻まれたハンセン病隔離の歴史』

2023年02月13日

神学生時代、沢正彦さんという東大から神学校に来た人がいた。故郷が、私と同じ大分県杵築市と知って、親しく付き合う仲になった。彼は神学校を卒業後、日本が朝鮮半島を植民地支配したことに対する贖罪の意識から、日韓の架け橋になりたいと韓国の大学に留学した。彼が発信する『ソウルからの手紙』を興味深く愛読した。彼の主目的は日韓史の研究を深めることであった。留学時代に、金縷さんと出会い、熱烈に求婚して結婚された。帰国後二人は牧師になられ、沢牧師は、横浜港南台教会の伝道集会の説教に来て下さった。金縷さんも『チマ・チョゴリの日本人』を上梓されて、韓国人から見た日本を巧みに表現された。彼女にも伝道集会の講師に来ていただいた。沢牧師はがんで49歳の短い生涯を終えられた。有能な人だただけに、残念な思いが拭い去れなかった。二人の間に生まれた子どもが沢知恵さんで、彼女はシンガーソングライターとして活躍している。

「東京新聞」の書評で、知恵さんが『うたに刻まれたハンセン病隔離の歴史 園歌はうたう』を岩波ブックレットで上梓していることを知り、早速読んだ。最初に、沢牧師が赤ちゃんの知恵さんを抱いている写真が載っていた。瀬戸内海にある大島青松園というハンセン病療養所を訪ねた時、周囲の反対を振り切って、彼女を抱いて連れて行った。もちろん、彼女は記憶にないが、20年ぶりで大島青松園を訪ねた時、入所者が「知恵ちゃん、大きくなったな。よう来た」と涙で歓迎してくれた。赤ちゃんを連れてハンセン病療養所を訪ねる人はいないので、皆さんの記憶に深く残り、再訪を喜ばれたのである。沢牧師の誠実な人柄が忍ばれ、懐かしく思い出した。

知恵さんは、全国に13ある療養所全てを訪ね、そこで歌われていた、また、歌われている23編の園歌を特定している。園歌が作られていく過程を克明に調べ、また、その園歌を入所者と一緒に涙ながらに、大声で歌うコンサートを開いている。彼女は、園歌は「抑圧と解放のはざまに生まれた音楽です」と言う。厳格に隔離され、著しく人権を奪われている中で、生の賛歌と解放への望みをどのように歌うかということであろう。

園歌は、学校の校歌が作られていくのと、軌を同じくして、作られていった。歌詞は、入所者や関係者が書いたものが多い。作曲は、誰でもできる訳はなく、音楽家や高名な作曲家に依頼している。曲は複雑な音階はなく、明るく美しく、元気のいいものが多いらしい。作詞は、時代の価値観を反映しているので、書き直された例も多い。例えば、ハンセン病患者を強制的に隔離する「無癩県運動」が叫ばれた時、ある園では「民族浄化を目指しつつ / 進む吾等の保養院」と歌われた。ハンセン病患者を隔離し、民族を浄化するという、恐ろしい歌詞である。また、ある園では「一大家族」という歌詞が登場した。これに対し、入所者の方が、家族から見捨てられた親なし子だったから、療養所の仲間は家族みたいであったが、実は、外に出られないという意味で、ここで、皆仲良くしなさいと聞こえたと受け止めたと言う。「民族浄化」「一大家族」は心にもないことではなく、そう思わないでは生き延びることができなかった。屈折した心に追いやられていることに胸が痛む。

入所者が作った「愛生園挽歌」の一部を紹介したい。「此の世にありては 共に喜び尊き御代の 光の内に 此の身の幸をば 共にうたいし友等は逝けり 遠きみくにに」「再びまみえむ 日をそのぞみつ 我等がこゝろ おどる嬉しさ」真っ直ぐな歌である。

知恵さんは下記のように言われる。音楽の力は肯定的で、私たちの人生を豊かにする。しかし同時に、政治、宗教などのイデオロギーに結びつく時、扇動されていく危険性を忘れてはならないと警告している。「この父（沢牧師）にこの娘（知恵さん）あり」である。